

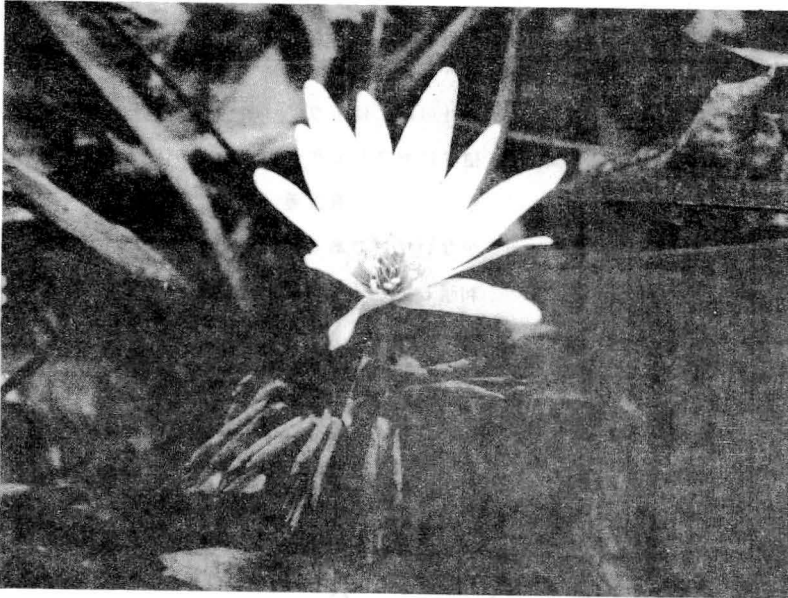
# FLORA KANAGAWA

神奈川県植物誌調査会ニュース 第17号

## OCT. 15. 1984

231 横浜市中区南仲通5-60 神奈川県立博物館内  
神奈川県植物誌調査会 振替口座 横浜3-10195  
TEL. 045-201-0926

## No. 17



アズマイチゲ  
*Anemone raddeana* Regel  
1983. May. 5  
相模原市上鶴間  
雲井泰子撮影  
ネガカラーフィルムより引伸。

### 県央のアズマイチゲ

去る8月末の県央ブロック会で、海老名市（EB）で発見されたアズマイチゲ（キンポウゲ科）が話題になった。これは市内柏ヶ谷・目久尻川ぞいの雑木林で1984年3月、森百合子氏によって発見された開花株である。柏ヶ谷付近は、都市開発が著しくアズマイチゲの自生地も早晚埋め立てられる運命にある。

1984年3月の各ブロック仮目録を点検したところ、類似種のキクザキイチゲは津久井1~3、山北3~5、清川、大山の8メッシュから報告されているが、アズマイチゲの記録はなく、県内ではかなり稀な種であることを知った。

そこで思い出したのが北相の自然 No. 25（北相自然

保護の会 May, 1984）の表紙を飾ったアズマイチゲの写真である。このアズマイチゲは1983年3月相模原市上鶴間（SA-4）で雲井泰子氏（上鶴間高校）により撮影された。最初の発見は1981年で、上鶴間高校の一期生の笠原君と吉田修久教諭により標本も作成されている。アズマイチゲはクヌギ・コナラ林の林床に一坪余りの群落をつくり、毎年2月下旬から3月中旬へかけて開花するが、土地開発が近くまで迫り目が離せない状態だという。

ともあれ、県央の2メッシュで発見されたこの記録は貴重なものといえるだろう。

（諏訪哲夫）

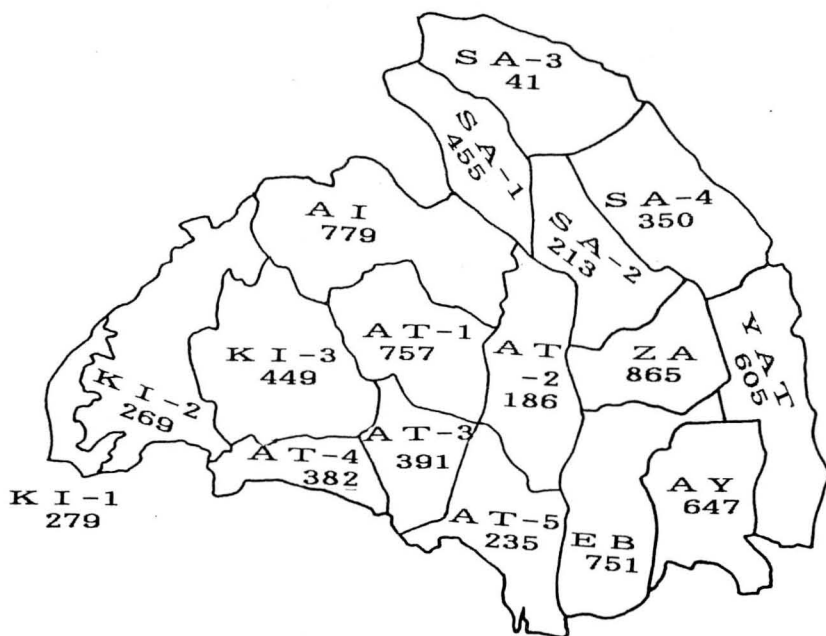
8月28日、県立有馬高校を会場に、県央ブロックの中間的な調査集計を行なった。

調査種類数は下の図に示したが、清川・相模原・厚木の一部にまだ調査不十分なメッシュがあり、今後の努力が待たれる。当日確認した調査の主担当者名をあげると次のとおりである。

清川1 (高橋秀男)、清川2 (杉本和永)、清川3 (秋山守・山本明)、愛川 (山口勇一)、相模原1・2 (八木・山口文男)、相模原3 (杉本和永・八木馨) 相模原4 (高橋秀男)、厚木1 (諏訪哲夫)、厚木2 (野間剛)、厚木3 (酒井重謙・長岡陶)、厚木4 (山本明)、厚木5 (武井尚)、座間 (諏訪哲夫・藤野知弘)、大和 (武井尚)、海老名 (伊藤健三・蒔田かをる・森百合子・羽野雅子)、綾瀬 (秋山守)。

(諏訪哲夫)

綾瀬市は東経139°24'-139°27'、北緯35°24'-35°27'の間に位置し、面積は22.24km、周田25km、東西4.2km、南北7.6km、海拔は吉岡の神崎で12.3m、大上共ヶ岡で84.3m、高低差72cm、年間降水量1108mm、年間平均気温15.0°Cである。植生は関東ローム地域、相模台地の南部にあたるため、そこに共通する特色を持っている。シラカシ群集は吉岡、早川地域にわずかにみられ、大体は二次林であるクスギ-コナラ群集を主とする雑木林とアズマネザサ-ススキ群集の草地になっている。農家の裏山に当る所や神社の森にはモウソウチク林、スギ、ヒノキ、サワラの植林に混在してケヤキ、シラカシなどの屋敷林や社寺林がみられる。高度差、気候の多様さ、自然林の残存林も少ない地域であるが、いままでに13科72種のシダ植物が判明している。



県央ブロック調査種類数  
Aug. 31, 1984

[シダ植物目録]

ヒカゲノカズラ科 トウゲシバ

イワヒバ科 カタヒバ、クラマゴケ、コンテリクラマゴケ

トクサ科 スギナ、イヌスギナ

ハナワラビ科 オオハナワラビ、フユノハナワラビ

ハナヤスリ科 ハマハナヤスリ

ゼンマイ科 ゼンマイ

フサシダ科 カニクサ

イノモトソウ科 クジャクシダ、イワガネゼンマイ、イワガネソウ、イヌシダ、フモトシダ、ワラビ、オオバノイノモトソウ、イノモトソウ、セフリイノモトソウ

オシダ科 イヌワラビ、ニシキシダ、ヤマイヌワラビ、ヘビノネゴザ、ホシダ、ヤブソテツ、ヤマヤブソテツ、イワヘゴ、ヤマイタチシダ、ミサキカグマ、オシダ、フジオシダ、ベニシダ、マルバベニシダ、オオベニシダ、ギフベニシダ、クマワラビ、トウゴクシダ、オオイタチシダ、ミヤマイタチシダ、ヒメイタチシダ、オクマワラビ、ハジゴシダ、ハリガネワラビ、アオハリガネワラビ、ヤワラシダ、ヒメワラビ、ミドリヒメワラビ、ミゾシダ、ホソバシケシダ、セイタカシケシダ、シケシダ、ムサシシケシダ、イヌガンソク、クサソテツ、コウヤワラビ、ゲジゲジシダ、ナライシダ、リョウメンシダ、オオカナワラビ、イノデ、アスカイノデ、アイアスカイノデ、ツヤナシイノデ、ジュウモンジシダ、キヨスミヒメワラビ、ヒメワラビ

シシガシラ科 コモチシダ

チャセンシダ科 トラノオシダ

ウラボシ科 マメヅタ、ノキシノブ

サンショウモ科 サンショウモ

[シダ植物ノート]

ヤブソテツとヤマヤブソテツ

ヤブソテツ 羽片は15-20対前後、羽片基部にほとんど耳片をもたない。葉の表面は濃い緑色をした光沢がある。(図1)

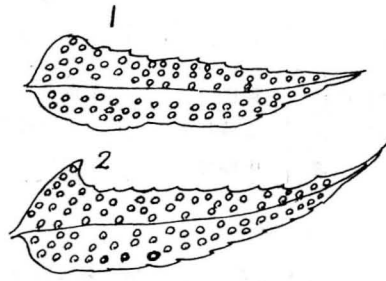


図1. ヤブソテツとヤマヤブソテツの羽片

1. ヤブソテツ 2. ヤマヤブソテツ

ヤマヤブソテツ 羽片の数は10対前後、羽片の耳片ははっきりしている。葉面の色はヤブソテツに比べて黄緑色で光沢が少ない。

イワガネゼンマイとイワガネソウ

イワガネゼンマイ 羽片は急に細まり尾状に伸びる。側脈は1-2回又状に分岐して平行にならび、網目をつくらない。

イワガネソウ 羽片はだんだん細まり鋭先形、側脈は結合して中肋に斜めに細長い網目をつくる。

\*メモ\*両面に毛のないものがイワガネゼンマイ、裏面にだけ毛のあるものをウラゲイワガネ、両面に毛のあるものをチチブイワガネという。

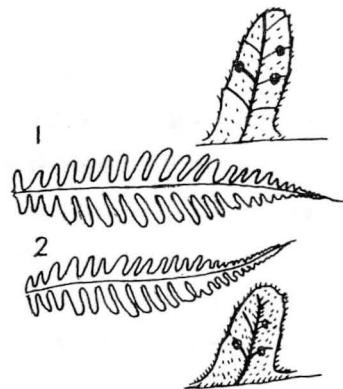


図2. ハジゴシダとヤワラシダの羽片および裂片

1. ハジゴシダ 2. ヤワラシダ

表. イノデ4種の鱗片、ソーラスの位置

	1. イノデ	2. アスカイノデ	3. アイアスカイノデ	4. ツヤナシイノデ
葉柄の鱗片の色	茶色	茶色	栗色	茶色・栗色
葉柄の鱗片の形	広披針形	糸状の鱗片でねじれる	針形	卵形で大きい
ソーラスの位置	中間性	中間性	縁寄り	中間性

ハシゴシダとヤワラシダ

ハシゴシダ 葉柄は黄白色、葉は草質、葉脈は縁に達し、ソーラスは縁寄り。

ヤワラシダ 葉柄は淡緑色、葉は柔らかい草質、葉脈は縁に達せず、ソーラスは縁寄り。(図2)

イノデ類4種について

イノデ、アスカイノデ、アイアスカイノデは市内広く分布するがツヤナシイノデは綾南地域で一株発見したのみで、市内では稀産種である。(表・図)

終わりに、シダ植物目録中、オシダ、フジオシダ、ミヤマイタチシダ、ヒメイタチシダ、オオカナワラビ、キヨシミヒメワラビは、大磯在住の田中一雄氏が綾西地域で採集された標本を恵与されたものである。市内では極めて稀な種で採集された氏の焔眼に感服すると共に敬意を表したい。

(秋山 守)

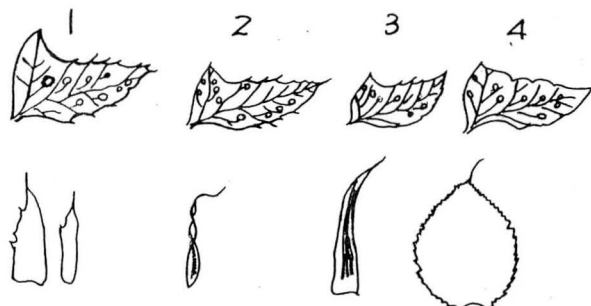


図3.  
イノデ4種の小羽片(上段)と葉柄基部の鱗片の形(下段)  
1. イノデ 2. アスカイノデ 3. アイアスカイノデ  
4. ツヤナシイノデ

座間の植物概況

東西5km、南北4km、面積18kmの座間市全域が1メッシュになっている。市の東半分は相模野台地、西半分は相模平野(沖積地)である。台地の最も高い所でも海拔89mで、可住地面積は93%にも及び、1960年以降急速に都市化した。植物調査は、1979年から1982年まで4年間7名の調査員によって行なわれ、報告書(座間市の植物 May, 1983)が刊行されている。

植物目録には860種類をあげているが、その後の訂正や追加は植物誌調査会の目録の上で正していきたい。

クロチクとヨメナ(Kalimeris yomena Kitam.)は削除する。また本誌前号で浜口哲一氏が湘南ブロックのジャ

ニンジン(タチタネツケバナ)と訂正されたが、標本を再検討の結果、座間産のものもタチタネツケバナであった。新たに加えたものは、ネズミホソムギ、キヨシミイボタ、アオイスミレ、アレチマツヨイグサ、クグガヤツリ(座間市四ッ谷 1983.8.17 大谷良子)、イカリソウ(座間市下栗原 1984.5.7 森百合子)、ネコノメソウ(下栗原 1984.4.29 森百合子)の7種である。

以上をまとめるとシダ植物61、裸子植物9、単子葉植物224、離弁花植物357、合弁花植物214、合計865種類である。

(諏訪哲夫)

## 厚木1の環境と調査概況

A T-1は、厚木市のうち荻野・棚沢および飯山の一部から成り立つ地域で、北の中津川と南の小姑川に囲まれ、中央を荻野川が流れている。面積は約19km<sup>2</sup>。

荻野川左岸の丘陵は鳶尾山地(235m)で、津久井城山や陣馬山に連なる小仏山地の一部である。昔はそのほとんどが薪炭林(雑木林)であったが、近年採石場やゴルフ場・住宅用地としてその大半を失った。尾根筋は市のハイキングコースとして整備されているので歩きやすい。

荻野川右岸は、経ヶ岳(633m)・華厳山(602m)・高取山(522m)などから成り立つ中津山地の一部である。この山系の成立は丹沢山地よりやや若いといわれ、かなり急な断層崖地形である。スギ・ヒノキの植林地が多いが北側の山裾は2つのゴルフ場に占領され、山への立ち入りはあまり簡単ではない。

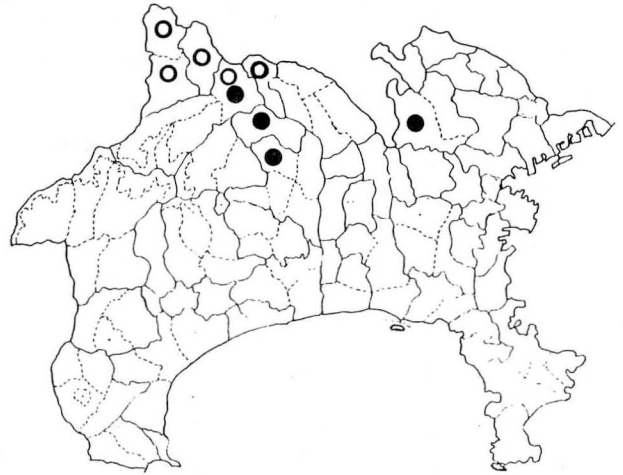
この山系の東端は、やや開けた荻野原台地で、以前はクワ畑が多かったが、現在は畑地も減り市街化が進んでいる。水田は荻野川沿岸と中津川右岸にみられるが、その面積は僅かである。

この地域の植物調査は、主として1983年よりはじめ、現在(8月)8割位終了という印象である。変種・品種を含む種類数は、シダ植物45、裸子植物8、単子葉植物193、離弁花植物328、合弁花植物181、合計755である。

これらの種類のうち、ヤブザクラ・ツクバトリカブトは普通にみられるもので、高橋(1982)は県央域の代表種にあげている。

カタクリは、従来津久井地区が知られているだけであったが、本年この地域(A T-1)のスギ林西斜面の群生地を確認した。また同じ県央地区の愛川(A I)や横浜緑区(M I-1)からも報告されているのは喜ばしい。

この外の種類で比較的稀産のものをあげると次のようになる。――ミズニラ(f.4)・ミヤマシラスゲ(f.210)・サワハコベ(f.325)・トウゴクサバノオ(f.331)・ユリワサビ(f.339)・ヒロハコンロンソウ(f.339)・ランヨウアオイ(f.316)・カントウミヤマカタバミ(f.348)・ミヤマハハツ(f.368)・ナガバノスミレサイシン(f.380)



神奈川県のカタクリ分布

○は宮脇・佐々木1980、●は植物誌調査会1984による

・ウリノキ(f.387)・イワニンジン(f.395)・ヤマボウシ(f.396)・ムラサキニガナ(f.438)・オカオグルマ(f.438)。

なお1983.3仮目録のジャンジンはタチタネツケバナに訂正する。

(諏訪哲夫)

## 厚木4・シダ類調査メモ

A T-4地区のお手伝いをしておりますが、多忙なためなかなかかどらず申し訳なく思っております。

本誌16号で守矢淳一先生が、湘南地区のシダ植物を詳細にまとめておられ、また仮目録を拝見し、いずれも大変参考になりました。そこで、担当地区のシダの調査でいくつか気のついたことがありますので報告いたします。

### (1) サイゴクイノデ

七沢の奥の亀石から七曲り峠への道すじと、広沢寺温泉の先の大沢の山ノ手沢ぞいの2箇所で見ました。サイゴクイノデは、暖かい地方ではよく見かける種類ですが神奈川県では割に少ないようです。仮目録には採集された標本のある地区が4箇所、文献によるものが8地区示されています。日本シダの会が現在作業を進めているシダの分布図にも神奈川県では7点が引用されているにす

ぎません。北限は今のところ太平洋側では埼玉県、日本海側では石川県の能登になっています。私の見た2箇所とも株数は少なく、保護しておきたいものと思います。株が少ないためか、サイゴクイノデを片親とする雑種はまだ見つかっておりません。

#### (2) チャボイノデ

このイノデは栃木県以南の太平洋側に見られる種類ですが、どこにでもあるというものではありません。仮目録によりますと神奈川県では標本での確認が4箇所、文献が8箇所となっています。1982年5月に鐘ヶ岳から山の神トンネルのわきに降りる途中で少数株が見られました。県央では清川3の煤ヶ谷の谷太郎林道のわきで見ることがあります。

#### (3) ドウリョウイノデ

ドウリョウイノデは御存知のようにイノデとアイアスカイノデの雑種です。1964年に倉田悟先生によって、道了尊をType localityとして発表され、しかも、その発表誌が横須賀市博物館研究報告でしたので、私達県民にとって縁の深いシダと申せましょう。

この雑種は比較的できやすく、両親の混在するところにはよく見出されるものです。私も県内の数箇所で見ることがあります。上述の七沢の亀石付近を調べました時に、両親がかなりありましたので、これならドウリョウが出てくるはずとよく注意したところ1株を確認することができました。ただ、この株は割に特徴がわかりにくい株でしたが、近くの道のわきのスギ林に入ったところ見事なドウリョウイノデの大株を見つけることができました。しかし、ここは県道のわきですので、ゴミが投げ込まれていて将来が心配です。

イノデの仲間は春になると冬芽がゆるんで、ワラビ巻きした葉を持ちあげてきますが、種類によってこの芽立ちと葉の展開の時期に差があります。この三者ではアイアスカイノデが最も早く、イノデがおそく、ドウリョウイノデは丁度その中間の頃になってくることが多いようです。これはミウライノデ(アスカイノデ×イノデ)でも同様で、以前に神武寺の谷で連続観察をしてみたことがあります。雑種が形態ばかりでなく、生理的にも中

間を示すことがあるのは興味深いことだと思っています。

#### (4) ホソバカナワラビ

七沢の亀石の近くの崖地の大きな群落がありますが、ほかでは見ていません。ホソバカナワラビは根茎をのばしてふえていきますので、あれば目にとまるはずなのですが、適地がないためでしょうか。ヒメカナワラビ、ハカタシダも少数を見たにすぎません。

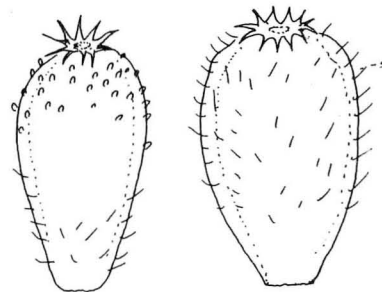
#### (5) ホホベニオオベニシダ

亀石付近にはオオベニシダが点々と見られますが、中にホホベニオオベニシダがあります。オオベニシダの包膜は普通灰白色ですが、これは中央の部分が淡紅色に色づき、美しいものです。倉田先生が「北陸の植物」13巻2号(1964年)にオオベニシダの新品種として記載されました。

#### (6) 未発見のシダ

現在A T-4ではシダ類を60種類(仮目録では73種類)確認していますが、当然あってもよいのに目につかない種類として、コバナカナワラビ、オオカナワラビ、ナライシダ、ミサキカグマ、サクライカグマ、トウゴクシダ、ヤワラシダ、シケチシダ、シシガシラ、ミツデウラボシ、ピロードシダ等があります。不動尻の奥の大山の下あたりは、まだ1-2回しか行っていませんので、よくさがせば出てくると思います。シダ類は意外なところにあたり、なかったりすることがありますので、今後の調査を楽しみにしております。

(山本 明)



カントウヨメナ(右)とユウガギク(左)

ある日、この両種の区別は標本上では必ずしもはっきりしないことに気がきました。色々検討の結果そう果の形が頼りになりそうだということになりました。上の図のとうりですが更にこの秋に良くしらべてみます。(OH)

## 類似種の見分け方

長年植物とつきあっているとちょっと見ただけで、これは何何と種名がわかるものである。私はこれを“直感同定”と秘かに名づけているが、これには大きな危険をはらんでいると思う。同属のものは勿論、科が違っても野外でざっとみただけでは区別できないほど似ているものがあるからである。このようなものは手にとって観察するか家に持ちかえり図鑑、ルーペの助けを借りて調べたい。要するに同定というのはなかなか難しいものであるということをおき対処したいと思っている。

同定にはまず植物の全体像を見るが、その中で葉、花、果実は重要な判別材料であろう。しかし私は葉だけで区別したいと思って一例としてヤハズエンドウ、スズメノエンドウ、カスマグサ、ホソバヤハズエンドウについてやってみた。ヤハズエンドウは別として、他の三者はチラと見ただけではみな同じ大きさの葉に見え区別できない。そこで標本を並べ直してにらんでいるうちに違いが見えてきた。スズメノエンドウは小葉の先がはさみで切ったようにたいらに見え、カスマグサは先がそのままとがってゆく。ホソバヤハズエンドウは多数の葉脈が鋭い角度で上に向かってるのがわかった。今までは豆果中の種子の数で区別していたが、葉による区別を知っておけば確認の材料がひとつ増えたことになる。

次に、タンキリマメ、トキリマメ、ヤブマメについてもやってみた。この三種も野外でのちょっと見では区別がつかないほど似ている。これも標本を並べてみるとわかってくる。私はこの手の3出複葉では頂小葉で比較することにしているが、それによるとタンキリマメは倒卵形の頭デッカチ、トキリマメは卵形の下ぶくれ、ヤブマメも下ぶくれである。このうちタンキリマメは葉柄にも葉にも褐色の毛があり、他の二者と区別できる。次にトキリマメの葉の先端は細くのびたがり方をするが、ヤブマメの方は先端は細くなるけれども丸い形で終わっている。

冬の山路で幹や枝にとげがある木を見たとき、ハリギリかカラスノザンショウかまたはタラノキであろうか。その時は葉痕で見分けるのが一つの方法であろう。

全く世の中には似た植物があるもので、ニガクサとツルニガクサ、カノコソウとツルカノコソウ、コンロンソウとヒロハコンロンソウ、カエデの仲間などきりがないが、植物体のどこかにはっきりとした相違点があるもので、そこを見分けるのが同定のコツというものであろう。

葉の時季、花や実の時季——結局一年中山野を歩きまわらなければならないことになる。御苦労さまである。

(酒井重謙)

## 心楽しき苦行（海老名の植物調査から）

海老名地区の本格的調査を始めてから2年目を迎えようとしている。「野の花が好き」というだけで、何の専門知識ももたない私達にとって、生えている草は全てちがった種類に見え、同定会の度に、いくつもの同じ標本に先生方をへきえきさせてしまったことだろう。それでもどうにか私達の頭の中には、出会った植物が整理されて記憶され、身近な植物については何とか名前が出てくるようになった。しかし、シダ植物、イネ科、カヤツリグサの類については未だに見当もつかず、情けない思い

をしている。この調査会と平行して、海老名市全体の植物フロラを調査しつくそうと大志を抱いたものの、肝心の名前がわからぬ状態ではそちらの方もなかなかちががあかず、そのうちに昨年咲いていたツリフネソウが宅地開発とともに埋められてしまったり、相模川の河岸工事でカワラノギクが消えてしまったりと、植物の変遷に調査が追いつかない状態である。消えてしまったイチリンソウ、ニリンソウ、ツリフネソウ、アズマイチゲの群生、休耕地のタコノアシとタカアザミの群生、水田のあぜ道

を埋めつくすほど咲き乱れたワスレナグサもあと何年見られることか。

寂しさと虚しさを感じつつ、種の多さに驚き、調査員としてひとつの草花に名前をつけていくことの恐ろしさも味わいながら、やはりまた新しい仲間に出会いたくて、

心弾む昨今である。

(伊藤健三・藤田かをる・森百合子・羽野雅子)

[編集追記] 海老名の植物は、シダ植物51、裸子植物8、単子葉植物203、離弁花植物311、合弁花植物178、合計751である。

## 愛川町の調査を分担して

昭和58年の秋、長州知事は「みどりのまち・かながわ運動」を県民運動として展開しようと提唱した。その主旨は、従来の開発の時代から、自然との調和のとれた生活環境づくりへの転換を狙ったものである。そして、都市の緑を「守り、創り、育てる」ことを運動の柱にしようとするものである。また県立自然公園の新たな指定やその事業の拡充を図り、自然の保護やレクリエーション施設としての場を提供してきている。

一方、自然との触れ合いの中で、次代を担う子供達の人間形成を図るために「自然・人との触れ合いを進める運動」も、驟然たる教育論議の第二段階としてアピールされている。

愛川町でも、新総合計画を本年度からスタートさせようとしている。この計画のメインテーマは「ひかり・みどり・ゆとり・ふるさと愛川づくり」となっている。変化に富む地形と豊かな緑を基盤に、農・工・商の多様な産業を土台として町の発展を図り、福祉の充実した住みよいふるさとづくりを目指そうというものである。

今日は、ひとつの時代の転換期を迎えたといえる。物の時代から心の時代へ、大企業から手作りの時代へ、開発・破壊の時代から調和と創造の時代へと、質的な転換が図られようとしている。

私が愛川町の植物を調査し始めた動機は、ふるさとである愛川町の自然がどんな姿をしているのか、豊かな緑とは何を指し、その中身はどんなものなのか、その実態

をこの目で確かめることにあった。

野山を歩いて感じることは、自然が語りかけてくる優しさであり、恐さであり、神秘的な自然への感動である。社会の変化と共に多様化してきた価値観の中で、子供達は葛藤し、委縮し、無気力・無感動・無関心を装う子供が増えてきている。この子らに、仏果山への山道を歩かせ、額に汗を流しながら小鳥のさえずりを聞かせ、むせかえる緑の香をかかせ、山頂に立って大空を仰がせ、郷土を見下ろしながら未来を語り合えたなら、大きな夢を育むにちがいないと思う。

愛川町の植物の調査はまだ始めたばかりの段階である。今後の研究課題も多い。植物学習のための教材化など一層研究を深めていきたいところである。

近ごろは、地方の時代とも言われている。生活の基盤としての我が町を見直し、そこに守り残されてきた文化や生活の遺産に、新しい時代に応じた創造を加え、個性的な町づくりのための活性化を図ろうというものである。このいわばローカルな文化の端くれのひとつとして、愛川町の住民の手で、愛川町をテーマにした研究に取り組むことは、それなりに意味があると思われる。

(山口勇一)

[編集追記] 愛川町の植物は、シダ植物56、裸子植物10、単子葉植物177、離弁花植物346、合弁花植物190、合計779である。



## 最近見た帰化植物

### 1. ツボミオオバコ (1984. May. 23, OIS)

大磯町高麗に国鉄の相模貨物駅がある。何か変わった帰化植物があるのではと前から目をつけていたのだが、最近、職員の方と知り合うチャンスがあり、5月23日に構内を案内していただいた。除草剤をしばしば使うとのことで、草の生えた所自体が少なかったが、資材置場の周辺の草むらで数株のツボミオオバコを見出した。他にはタチオランダゲンゲが目立ち、イヌカキネガラシ、ヤバネオオムギも記録した。

### 2. コシミノナズナ (1984. May. 28, HI-1)

平塚市吉沢で、台地上の畑の中の道を歩いていたところ、牧草を作っている畑のすみに本種を見出した。この日は、ほかに土屋の座禅川の土手で、ヒレアザミも採集した。どちらも日本に帰化したのは古いらしいが、あまり見かけない植物で、湘南では初記録だった。

### 3. ウスベニツメクサ (1984. Jun. 1, NIN)

二宮町打越の堆肥を入れた畑で採集した。花は紅色で、茎や葉に腺毛が目立ち、種子に翼のあるものはないといった特徴からウスベニツメクサと考えた。しかし、膜状の托葉は離生している所と合生している所がある。雄しべは少なく5本であるなど、ウシオツメクサに近い点もあるので、詳しく検討する必要があるだろう。

### 4. タチチコグサ (1984. May. 11, HI-3) とウスベニチコグサ (1984. Jun. 10, HI-1)

調査のかなり進んだ平塚でも、歩いていない所を回ると、新しい種類が見つかることが少なくない。5月11日には明石町の広い通りで、分離帯になっているグリーンベルトを歩いてみたところ、タチチコグサとインチンナズナという収穫があった。

ハハコグサ属 *Gnaphalium* の帰化種については、湘南ブロッコリーの標本は十分整理できていなかったのも、泉博の高橋先生に文献(小山博滋1978: 帰化植物チチコグサモドキとその仲間. 植物分類地理 Vol. 29, No. 1-5)を送って頂き、検討してみた。その結果、現在までの収集標本にはチチコグサモドキ、タチチコグサ、ウスベニチコグサの三種が含まれていることがわかり、6月10日に北金目の路傍で採集したのはウスベニにあたるものだった。

これらの区別点を簡単に紹介しておくと、チチコグサモドキは各種の図鑑にあるように、総苞の下部が球状にふくれ、外片が密な綿毛でおおわれている。葉は茎の上部までサジ形で灰緑色、両面に白毛が生えるが、下面はより密に生えるため上面より白っぽく見える。タチチコグサは茎の中部以上の葉が巾2~5mmの線状披針形で両面に白毛が生え、両面の色の差がほとんどない。総苞は下部がふくれず、外片にまばらに白毛が生える。湘南にはCH-1、CH-2、SAM、HI-3、OI、FU-3の標本がある。ウスベニチチコグサは、全体のようにチチコグサモドキによく似ているが、葉の質が厚く、上面の毛がまばらで上面の深緑色と下面の白色との対照がはっきりしている。総苞はタチチコグサに似ていて、外片はほぼ無毛、内片の先端はつばみの時は紅色を帯び、果時には淡褐色に染まる。この種は図鑑には出ていないが、かなり多いらしく、湘南ではFU-1、FU-2、EN、CH-2、HI-1、HAT-5の標本がある。エダウチチチコグサは、北隆館の帰化植物図鑑に図示されているが、総苞片の先端にV字型の黒斑があるという。

(浜口哲一)

## 文献紹介

1. 津久井城山及び三増の植物. 1983年11月(東京薬科大学植物研究部, 八王子市堀之内1432-1)

2. 神奈川自然資料 No. 5. 1984年3月(県立博物館, 横浜市中区南仲通り5-60)

総説(10P)、目録(27P)、索引(15P)、図版(8P)

植物関係として、内田藤吉・小清水康夫: 神奈川県西

部におけるカンアオイ属の分類と分布(9P)、高橋秀男:丹沢のアオベンケイ(1P)、大森雄治:三浦半島で再発見されたタシロラン(3P)、大場達之:ミヤマカンスゲとゴンゲンスゲの雑種(1P)、新帰化植物アメリカトゲミギク(新称)神奈川県宮ヶ瀬に産す(3P)、生出智哉:箱根の蕨類目録(7P)

3. 相模原市植物調査報告書. 1984年3月(相模原市植物調査会, 相模原市中央2-11-15 相模原市教育委員会内)

調査概要と植生(25P)、帰化植物(5P)、フロラ(15P)、特定植物分布図(7P)、図版(3P)

4. 神奈川の植物ときのこ. 1984年7月(暁印書館, 東京都文京区小石川1-13-2)

カラー図版(16P)、神奈川県植生(4P)、種子

植物(38P)、羊歯植物(40P)、コケ植物(42P)、海藻(21P)、地衣類(9P)、キノコ(50P)

5. 植物と自然. 8月号, 1984年8月(ニュー・サイエンス社, 東京都千代田区神田錦町3-21)

箱根の植物特集として、松浦正郎:箱根の植物—研究のあしどりと概観(5P)、田代道弥:箱根地方の固有種群(6P)、井上香世子:箱根仙石原湿原(5P)、高橋 勉:箱根町立箱根湿生花園について(5P)

6. 神奈川県文化財調査報告書. 第40集, 1980年3月(県教育委員会文化財保護課, 横浜市中区日本大通33)

宮脇 昭・佐々木寧:神奈川県内に生育するカタクリの群落学的考察(25P・付表1)、宮沢敏雄:大磯高麗山の自然林の現況調査(24P)

(諏訪哲夫)

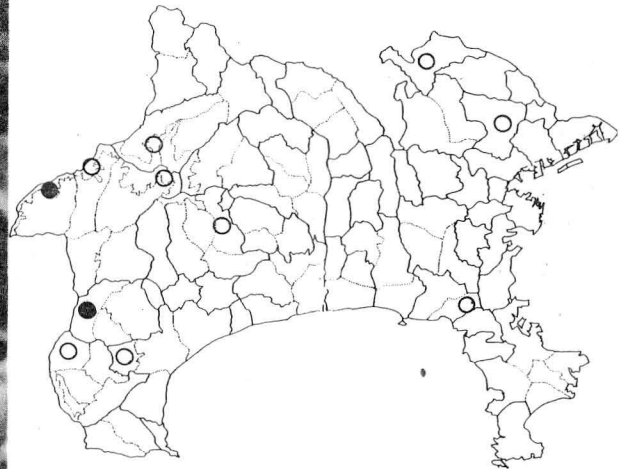


かながわの希産・貴重植物 (2)

ムラサキ

*Lithospermum erythrorhizon*

山地や丘陵地のススキ草原にはえる多年草。夏から秋にかけて、径1cmほどの白い花を、葉えきごとに一花ずつ咲き続けては伸びる。細長い根は古代から重要な紫根染めの素材であった。この花を今年の秋の重点地区調査の折にMIA-1で発見した。神奈川県における今まで知られた分布地点は次の図の通りである。(高橋)



編集 県央ブロック 18号は横浜、川崎ブロックです。